
精霊使いと砂漠のあるじ

藤白竜胆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

精霊使いと砂漠のあるじ

【Nコード】

N 6 1 7 9 P

【作者名】

藤白竜胆

【あらすじ】

土竜の目覚め——それは、精霊たちの母体の目覚めでもある。其の意味するところは、自然界の暴走——。初代人間王の孫である精霊使いは、土竜に逢うため、ふらりと旅立つ。

精霊使いとオアシスの君主

ぴーぽ、ぷ、ぴーぽぷいー。

照り返す陽射しを避けるように、木陰に腰を下ろした少女がひとり。高く束ねられた黒曜の髪が緩やかに風に流れ、健康的な褐色の肌は、きらきらと輝いている。

すい、と桜色の唇から笛を離し、空を見やるその瞳は深緑と、赤褐色の金銀妖瞳である。

先程の間抜けな音は、この少女の首から提げられた笛から発せられたものに他ならない。

『さて、と。行きますかねえ…』

ばさり、と鮮やかな朱の外套を翻しながら立ち上がる。

黄の織り込まれた、艶やかな色彩のそれは、南の人間である証。

「あら、もう行ってしまわれるの？旅人のお嬢さん。」

『ああ、イプさん。』

「妙な愛称をつけないでくださいな…」

呆れ顔で少女を見下ろすのは、このオアシスに相応しくない白い肌と銀髪の、初老の貴婦人。

仮にも、広大な砂漠地帯である西大陸の統治者その人なのだが、こ

の少女には一切通用しないらしい。

『ふふつ、わかってますよ、イプシロン叔母さま。』

「相変わらずね、シグマ」

一体誰に似たのやら、とひとりごちるイプシロンを余所に、シグマはさつさと外套を目深に被る。

『父様は、南大陸^{あつち}の精霊たちの暴走を食い止めるのに尽力されてますから…私が会いに來ただけでは、ご不満ですか？』

フードの端だけを摘みあげ、上目遣いに見上げる少女に、イプシロンは「う…」と、ひとつ呻くしか出来ない。

一国の主であり、数少ないオアシスの水の管理を担う人であれど、姪には弱い、ということである。

『微かに、孵化の波動を感じますからねえ。西大陸^{こっち}の土竜も、そろそろ、ですよ。』

煌りと、少女の赤褐色の瞳が、カーネリアンの輝きを放つ。

それを見て、貴婦人はひとつ溜め息を零す。

「これと決めたら譲らないところは、デルタ兄さん譲り、ですわね。」

やれやれと首をふりながら、諦めと心配の入り混じった瞳で少女を見やる。

少女はというと、くすりと笑いながら笛を弄びつつ、空いた手は空中をなぞている。

『私には、心強い味方がいますから。』

そう言いながら、一陣の風と、それに纏わりつく焔を手中に描き出す。

『サマンサ。エミリオ。』

流麗な軌道を宙に描きながら現れたのは、シカイの火山の炎の少女。それから、アシハラの草原の風の青年。

二人の精霊の瞳には、理性の光が宿っている。

「暴走しなかった精霊が、まだ居りましたのね…」

感慨深げに溜め息を吐く貴婦人に、精霊達は、彼らの流儀に則った最敬礼を示す。

『私の昔馴染みの精霊です。幼い頃、名を交わしたので…契約者が居る精霊は、暴走せずに済むようですねえ。』

「シグマ…あなた、まさか…」

ふと口元に笑みを浮かべた少女の様を見て、貴婦人は顔を強ばらせる。

『土竜は、精霊達の母ですからねえ。荒ぶる前に契約を交わせば、何とかなるんじゃないだろうか。』

何処かしら遠い目をした姪の姿に、何を云っても無駄だと悟った貴婦人は、ややうんざりと首を振る。

「…貴女の決意はわかりましたわ。但し、必ず無事に帰ってくることに。これだけは守って下さいまし。良いですわね？」

少女の目線に自分の目線をしっかり合わせながら、念をおす貴婦人

の姿に、少女はにこりと笑みを返す。

『そうですねえ。まあ、なんとか和解してきますから、ご安心を。』

と、云うや否や、少女は外套をはためかせながら駆けてゆく。

寝起きの土竜の、不機嫌さを問われぬうちに、と。

残された貴婦人はというと、深い溜め息の後に、すい、と視線を一点に向ける。

「そこにいるのは、わかってますのよ。出てらっしゃいな。ツエータ、イエータ。」

「ばれていましたか？」

と、よくしなる木々の枝の間から聞こえる声がひとつと。

「まあ、隠そうともしてませんでしたけれどね。」

その木陰から、突っ込みを入れる声がひとつ。

姿を現した彼らの容姿は、まるで一方をトレースしたように見分けがつかない。

「しかし、シグマも無茶をしますね。」

浅黒い頬を引っかきながら、一方が云い。

「まあ、デルタ兄の娘だから、仕方ないでしょう。」

銀系の髪を弄びながら、一方が応える。

そうして二人、水色の瞳と灰色の瞳を合わせながら、ふつと苦笑を浮かべる。

その様子に、貴婦人は再び溜め息を吐いてみせると、口を開く。

「貴男達、面白がっていないで、」

「今行きますよ?」

「じゃ、水路使わせて貰いますね? 姉上。」

皆まで云わないうちに、ざぶり、という激しい音になる。

砂と腰高い草木のあった場所には、先程までなかった泉が現れ、青年二人が見事なまでのシンクロで其処に消えたのだ。

またも残された貴婦人は、すっかりと頭を抱えてしまっている。

『どうして、こうもうちの家系は…』

と、ひとりごちる声は、砂を巻き上げながらゆく風に掻き消えていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6179p/>

精霊使いと砂漠のあるじ

2011年1月4日02時06分発行